

顧問先企業様限定ニュースレター

日々晴天なり ～はるおのつばやき～

2019.3月号 Vol.50

平成31年3月1日発行



日ごと春めいてまいりましたが皆様お変わりございませんでしょうか。
 今月は井上弁護士のエッセイ風の「日々晴天なり」をお届けしたいと思います。

人生には表と裏がある

弁護士業をやっていると、様々な方の人生の機微に触れる機会が多いです。

「まさかこんな立派な方が…」というのありがちな相談です。

私が弁護士という仕事をしていて常々感じるのは、人生には、常に表と裏があるということです。

そして、「真面目なキャラの方ほど、あるいは、社会的なお立場のある方ほど、表と裏の差が激しい」とも感じます。

だけど、私はそれが恥ずべきことではなく、「それが人間という生き物。そうやって自分のバランスをとっているのだ。」と思います。分かりやすい例で言えば、経営の神様と呼ばれる故・松下幸之助さんの書籍を読むと、まるで聖書のような素晴らしいことが書いてあって、経営者の皆さんが松下さんの本で必死に勉強しておられます。だけど、松下さんが亡くなってみたら、松下さんには婚外子が4人もいました。松下さんですら、そうやってバランスをとっておられたのだと思います。

日産自動車のカルロスゴーン氏の事件も通ずるところがあるかと思います。もちろん、カルロスゴーン氏の事件は刑事責任が成立するなら、それ相応の罰を受けてもらわないといけません。あれだけ大きな権限を握っていたことの裏の面、バランスをとった結果なのだと思います(行き過ぎなので別の意味でバランスが崩れています...)

我々弁護士の出来ることは、間違いを叱責するのではなく、ご本人のしたことや心を受け入れて、これからどうするのか、あるいは、取り返しのつかないことになる前で止めてあげて、これから先のことを一緒に考えることかと思います。

100点満点の人間なんてそういるものではありません。皆さん、何か負い目や人に言えないことを抱えながら生きておられるのだと思います。

感性を磨く旅

そのような時に、自分は弁護士としてどのようなアドバイスや対応が出来るのか、感性を磨いておく必要があると思います。ある方からは、「とりあえず、美術館などをみて回るのもいいよ。」とアドバイスを受け、島根県立美術館はもちろん、東京などへ出張で出た際は、銀座、丸の内、六本木、上野など時間があれば美術館をまわったりもしています。残念ながら、私の感性では美術館に入って何かピピッと感じたりすることはありませんが(笑)、とりあえず美術館に足を運んで見て回ることが大事なのかなと思って続けております。

そのような私ですが、五感に響くような体験をした美術館(というか記念館)が一つありました。それは京都にある河井寛次郎記念館です。ご承知の通り、故・河井寛次郎さんは島根県出身の有名な陶芸家で、記念館は寛次郎氏の遺邸です。展示品からのインスピレーションはもちろん、記念館そのものから醸し出す雰囲気は私の五感にピンピンくる感じがありました。私が訪れた日は雨の日で、シトシト降る雨と合わさって、何とも言えない雰囲気が、「五感に優しい」という表現がぴったりくるのでしょうか、そんな感じでした。

読書から得られるもの

他方で私は読書も好きです。人間形成や感性磨きなど読書の効用は言い尽くせないものだと思います。野村克也氏の著書にこんなくだりがありました。

「重要なことは苦勞することそのものではない。苦勞を経験した時、いかにそれと真剣に向き合い、努力を積み重ね、乗り越えることができたかどうか。もし本気で苦勞から抜け出したいのなら、当然、そのための方法を一生懸命考えるようになる。そこで生まれるのが「思考」という習慣である。プロ野球の世界で言えば、例えば自分が二軍から這い上がり一軍のレギュラーの座を掴むためにはライバル達と比較して自分に何が足りないのか、そのためには何をしたらいいのか。頭を使って必死に「思考」するはずだ。

そうすると、いつしか自分や周囲の人間が置かれている状況や心理状態などを敏感に察することができるようになる。それは「感性」が磨かれている証拠である。」というものです。

つまり、自分の置かれている状況や苦勞を乗り越えるためにどうしたらいいか、本気で生きている人間は「思考」するはずである。そのうちに自分の周りの状況などに気づいたり、察したりできるようになり、具体的に対処できるようになる。これはまさに「感性」が磨かれ、働くようになった証拠である、ということと私は考えました。

私自身の感性磨きという点からしますと、自分の置かれた状況を乗り越えようと必死で考え、対策を練る、しかも冷静に物事を見ていくということを繰り返しているうちに感性が磨かれるということでしょうか。クライアントからは色々な相談があります。自分自身の経験・体験を積むことの重要性も感じております。そのようなことの繰り返しで、相談に来られたクライアントに最適の解決策をご提案できるようになるかと考えております。そして、日々の生活の中で感性を磨いてきたことがそのバックボーンなるのだと考えております。

